

考古学班調査報告

大崎上島諸島における製塩遺跡について

—付編 広島県製塩土器出土地地名表および主要遺跡概要—

古瀬清秀

はじめに

瀬戸内島嶼部の考古学上の調査は、他の地域に比較してみると、あまりなされていない。この理由については、遺跡の絶対数が少ないこと、平地が狭く利用できる土地ははやくから開墾され、遺跡自体があまり残っていないこと、また大規模な土地開発の少ないことなどが指摘できる。大崎上島諸島についても同様な状況にあるといえようが、ここでは戦後1950年代の島の再開発に伴って遺跡、遺物が発見され、さらに1954(昭和29)年の岡山大学による香川県喜兵衛島の製塩遺跡調査を契機として、瀬戸内島嶼部特有の海岸に立地する遺跡、遺物が注目されるようになった。そして地元の現東野町公民館長福本清氏を中心とする研究者グループによって、調査が進められた結果、詳細な遺跡の分布状態が把握できるようになり、また考古資料も徐々に蓄積されるようになった¹⁾。この間、1954、1955(昭和29、30)年には、豊元国氏を中心とする府中高校のグループが大崎上島諸島に渡り、福本氏とともに遺跡踏査を実施し、新たに多くの遺物を採集している²⁾。現在、これらの各遺跡で採集された各時代にわたる豊富な遺物は、東野町公民館に一括して収蔵されている。

今回の大崎上島諸島の合同調査においては、考古学班は、特に製塩遺跡および関連遺物についての調査に主眼をおいた。今回報告の製塩遺跡および遺物の調査については、前述の福本、豊氏らの調査成果を利用するとともに、10月7、8日の2日間、広島大学文学部考古学研究室潮見浩、古瀬清秀、中越利夫の3名が、福本氏とともに東野町白島牛ヶ首遺跡を現地踏査し、東野町公民館に所蔵されている遺物について、実測、写真撮影を行なった。また、1956(昭和31)年に、大崎下島御手洗史編纂に伴い、広島大学潮見浩、藤田等、本村豪章の3名が渡島して採集した遺物(広島大学所蔵)も利用している。なお、生野島の遺跡については、1978(昭和53)年に電源開発株式会社による生野島月の浦湾埋立計画があり、これに伴う埋蔵文化財分布調査を、福本氏の協力をえて、広島大学潮見浩、河瀬正利ほか数名で実施し、最近の遺跡の概要を知ることができた。

なお、付編の広島県製塩土器出土地地名表および広島県製塩土器出土主要遺跡概要については、広島大学大学院学生藤野次史が執筆作成していることを付記しておく。

註

- 1) 福本清編『大崎上島 東野村史』上巻 東野村、東野村教育委員会 1962 大崎上島諸島の考古学調査の概要を丁寧にまとめている。
- 2) 豊元国編「芸備文化」第10・11合併号 広島県学生生徒地方史研究会 1958 生野島を中心に、大崎上島諸島の考古学調査の成果をまとめている。

1. 大崎上島諸島の位置および環境

大崎上島は竹原湾の真南約4Kmの沖合いにあり、約38Km²に及ぶ面積をもつ。広島県中部島嶼部では最大の島となっている。行政的には、北部に豊田郡東野町、南西部に同郡大崎町、南東部に同郡木江

町の3町がある。島は北東—南西に長く、南北約8Km、東西約9Kmをはかる。島の南部から東部には、最高峯の神峯山(標高452.8m)を中心に脊梁山地が長くのびている。このため、山地の東側では平地が少なく、山脚にすぐ海がせまっている。山地の西側は、低丘陵がよく拡がっており、比較的平地がみられる。海岸線には出入りが多く、複雑な地形となっている。大崎上島周辺の年間降水量は1200mm前後、年間平均気温は15°C前後となっており、典型的な瀬戸内気候帯に属し、はやくから柑橘類栽培が行なわれている。島の西北の海域には、生野島・臼島・長島など20島以上の小島が近接して点在し、大崎上島を中心に島嶼群を形成している。この大崎上島諸島の南側海域には、約3Kmの狭い水道を隔てて、豊田郡豊町のある大崎下島がある。また、東から南側にかけての海域には、1~3Kmの水道を隔てて、愛媛県側の大三島・岡村島などの諸島が連なっている¹⁾。

大崎上島諸島を形成する周辺小島嶼群は、北辺にある生野島・臼島・船島・佐組島・契島などが東野町に、南辺に位置する折免島・長島・津久賀島などが大崎町に属する。生野島は小島嶼群の中では最大の島で、南北2Km・東西2.3Km、面積2.2Km²の大きさである。北部には大きく湾入した入江もあって、全体に複雑な海岸線となっている。大崎上島北端部と幅0.5Kmの狭い水道を隔てている。生野島のすぐ西側には契島があり、島全体が鉛製錬工場となっている。船島は、生野島の南側にあつて、大崎上島と0.5Kmの水道を隔てている。南北0.8Km・東西0.5Km、面積0.3Km²の島である。臼島は東野町の西端にあり、大崎上島と3Km離れている。南北に細長く、南北1.6Km・東西0.5Km、面積0.6Km²の島である。折免島は臼島の南側0.5Kmにあり、南北0.4Km・東西0.3Kmの小島である。長島は折免島のさらに南にあつて、大崎上島とは幅0.5Kmの狭い水道を隔てている。生野島に次いで大きく、南北1.8Km・東西1.3Km、面積1Km²の島である²⁾。これらの小島嶼群は4、50年ほど前から開墾が進み、瀬戸内の島嶼部特有の段々畑に柑橘類の栽培が行なわれていたが、最近では、生野島・長島などの大きい島を除いて、無人の状態となっている。

注

- 1) 米倉二郎監修『広島県史』地誌編 広島県 1977
- 2) 広島県企画部統計課編『第23回 広島県統計年鑑』広島県統計協会 1979

2. 大崎上島諸島の歴史的環境

中部瀬戸内東部の備讃島嶼部では、旧石器時代の遺跡、遺物が多数発見されていて、旧石器時代研究に多くの資料を提供している¹⁾。広島県島嶼部においては、現在のところ、大崎上島諸島を含めて明確な旧石器時代の遺跡、人工遺物は確認されていない。しかし、広島県西部島嶼部の倉橋島周辺では、多数のナウマンゾウ・ニホンムカシジカなどの化石が海底から引揚られている²⁾ので、これらの洪積世に生存していた動物群を追って、旧石器時代人が狩猟活動を行なったことも十分に想定できるが、石器などの人工遺物を確認するには至っていない。

大崎上島諸島で確認できる最も古い人工遺物は縄文時代に属するものである。生野島で2、3の遺跡が確認されているが、他の諸島では発見されていない。生野島西岸のかんね鼻周辺に位置するかんね遺跡群、東岸の大馬取遺跡などで、縄文時代後期の土器や石斧、石匕などの石器が出土している。縄文土器は、口縁部に特徴ある沈線あるいは刻み目を施した鉢形土器を主体としたものである。いずれも砂粒を多く含み、暗褐色を呈している。縄文時代の遺跡はすべて海浜に立地しているので、漁撈活動を生業とした小集団が居住していたのであろう。

弥生時代になると、遺跡数が若干増加するが、遺跡立地は縄文時代と変わらず、海浜部が多い。生野島・臼島に遺跡があるが、大崎上島では現在のところ確認されていない。生野島においては、縄文時代遺跡に複合して、かんね遺跡群、小馬取遺跡、大馬取遺跡など海浜に立地する遺跡と、いさぎ谷遺



第1図 大崎上島諸島遺跡分布図 (5万分の1 三津)

- 1.月の浦3号遺跡 2.七谷遺跡 3.小馬取遺跡 4.大馬取遺跡 5.榎迫遺跡 6.観音浦遺跡 7.福浦2号遺跡 8.大がね遺跡 9.かんね1号遺跡 10.かんね2号遺跡 11.草の浦遺跡 12.船島2号遺跡 13.牛ヶ首遺跡 14.折免島南遺跡 15.布浦遺跡 16.長松遺跡 17.瀬井遺跡 18.鹿老渡遺跡 19.いさぎ谷遺跡 20.峠遺跡 21.かんね古墳 22.福浦古墳 23.枯木鼻古墳 24.木村島遺跡 25~29.折免1号~5号古墳 30.古江遺跡 31.盛谷1号遺跡 32.盛谷2号遺跡 33.白水遺跡 34.板摺古墳 35.黒崎古墳 36.光金谷古墳 37.大田古墳 38.本郷遺跡 39~42.瀬井1号~4号古墳

跡、峠遺跡などのように、やや内陸に入った地点に立地する遺跡の2者がみられる。臼島ではやはり海浜に立地する牛ヶ首遺跡がある。それぞれの遺跡で、弥生土器、磨製石斧など少量の遺物が出土しているが、前期に属するものはなく、すべて中期以降に属する。生野島の遺跡立地には海浜以外のものがあるが、島の中央部に近いやや小高い地点にあり、その立地をみる限り、畑作は可能だとしても、水稲耕作は不可能に近い。したがって、生野島・臼島の弥生時代遺跡は漁撈活動など海に依存する専門タイプの生業を背景に形成されたと考えられるが、季節的な漁撈活動などの目的で、一時的に営まれた遺跡ということも考慮する必要はあろう。

古墳時代になると、大崎上島諸島では遺跡が急激に増加する。これまでは、生野島を中心に遺跡が分布していたが、大崎上島・臼島・船島・折免島・長島などほとんどの島嶼において、遺跡、遺物が

発見されるようになる。しかし、古墳、集落跡といった性格のものは少なく、ほとんどが土器製塩遺跡であり、瀬戸内島嶼部特有の遺跡のあり方を示している。現在のところ、大崎上島諸島で17ヶ所の製塩遺跡が確認されており、広島県島嶼部における最大の製塩遺跡密集地域となっている。

大崎上島の瀬井遺跡・長松遺跡、生野島のかんね遺跡群・月の浦3号遺跡・大馬取遺跡など、船島の船島2号遺跡、折免島の折免島南遺跡、長島の布浦遺跡が代表的製塩遺跡としてあげられる。いずれの遺跡でも、古墳時代前半期に属するワイングラス状深鉢に倒杯形脚台のつく型式の土器、古墳時代末～奈良時代に属する薄手尖底型式の土器が出土しており、古墳時代を通じて土器による製塩が行なわれていたことが窺える。また、それぞれの遺跡で多くの土師器、須恵器が共伴しており、これらは製塩に従事した人々の日常生活用土器類と考えられる。

製塩遺跡の他に、古墳が分布している。大崎上島・生野島・折免島・長島で10数基の古墳が確認されているが、いずれも小規模である。大崎上島では西海岸に多く、瀬井1～4号古墳⁹⁾（大崎町瀬井、1・4号古墳は箱式石棺、4号古墳の箱式石棺は全長1.6m・幅0.4m・高さ0.3mで、頭部に塗朱する。2・3号古墳は横穴式石室）、黒崎古墳（大崎町唐浜、箱式石棺）、光金谷古墳（同、箱式石棺）、大田古墳（東野町大田、箱式石棺）がある。生野島では枯木鼻古墳（東野町、箱式石棺3、長さ1.1m・幅0.25m・高さ0.1～0.4m、長さ0.8m・幅0.2m・高さ0.2m、長さ不明・幅0.2m・高さ0.2m）、福浦古墳（同、箱式石棺、長さ1.75m・幅0.2～0.4m・高さ0.3m）、かんね古墳（同、横穴式石室、長さ4.5m・幅1.1m・高さ1m）がある。折免島では折免1～5号古墳（大崎町、2・3・4号古墳は箱式石棺、他は横穴式石室、3号古墳の箱式石棺は長さ1.5m・幅0.3m・高さ0.35m、1号古墳の横穴式石室は長さ4m・幅1.6m・高さ0.9m）、長島では板摺古墳（大崎町、横穴式石室）がある。埋葬施設には箱式石棺と横穴式石室があり、前者が須恵器を伴わない点などから古く位置づけられ、横穴式石室導入以前の古墳とみられる。箱式石棺をもつ古墳は墓域の明瞭なものが少なく、盛土をあまりもたない。出土遺物としては、大田古墳で鉄刀2、光金谷古墳で鉄刀1、折免3号古墳で鉄片、貝殻などが知られているが、時期を明確に示すものはほとんどみられない。横穴式石室をもつ古墳は若干の墳丘を有するが、径10m未満・高さ1.5m程度である。内容の明確なかんね古墳をみると、6世紀後半～末頃に比定できる須恵器蓋杯2以上・壺1・短頸壺5・平瓶1・提瓶3のほか、銀環1、鉄鏃3などが出土している。これらの古墳は、海に依存した経済を基盤にして出現してきたものと考えられよう。

古墳時代より後の時代になると、大崎上島諸島では遺跡が急減する。奈良時代後半頃にも白島・長島などで、土器製塩のなされていたことが出土遺物から知られるが、まもなく遺跡は消失する。奈良時代終末から平安時代にかけて、塩の生産に大きな変革期の訪れたことを意味するのであろう。

平安時代以降、瀬戸内島嶼部では海賊衆の活躍が目立つようになる。中世以降、安芸小早川氏と伊予海賊衆との抗争が続き、大崎上島には6ヶ所に山城が点在して築かれている。これらの山城の構造、内容については、発掘調査の実施されたものはなく、詳細は不明であるが、大崎上島のほぼ中央部に近い標高30mの尾根に築かれた宇根城址（大崎町原田）では中国古銭、土器などの出土が伝えられる⁴⁾。

参 考 文 献

- 広島県教育委員会『広島県埋蔵文化財包蔵地地名表』1961
- 文化財保護委員会『全国遺跡地図（広島県）』1967
- 豊 元国編「芸備文化」第10・11合併号 広島県学生生徒地方史研究会 1958
- 後藤陽一編『瀬戸内御手洗港の歴史』御手洗史編纂委員会 1962
- 福本 清編『大崎上島 東野村史』上巻 東野村、東野村教育委員会 1962

註

- 1) 瀬戸内海歴史民俗資料館『瀬戸内海地域先土器時代遺跡地名表』1975
- 2) 潮見 浩・川越哲志「倉橋島共同学術調査報告 考古学班調査概要」『内海文化研究紀要』第2号 広島大学文学部内海文化研究室 1974
- 3) 広島県教育委員会文化課 桑田俊明氏の御教示をえた。文化課では、1980(昭和55)年4月に尾辺ヶ鼻古墳(瀬井4号古墳)の発掘調査を実施している。なお、この時の分布調査によると、瀬井古墳群のうち、確実に現存するのは2基で、しかも横穴式石室の存在は疑問のあることも合せて御教示をえた。
- 4) 広島県教育委員会『瀬戸内水軍 瀬戸内水軍資料調査報告書』1975

3. 大崎上島諸島における製塩遺跡

広島県に属する瀬戸内島嶼部では、多くの製塩遺跡の存在が確認されているが、これまでに製塩遺跡の発掘調査が実施されたこともなく、製塩遺跡についてはあまり内容がわかっていないのが実情である。今回、調査の対象となった大崎上島諸島は、広島県島嶼部における製塩遺跡の最も濃密に分布する地域である。現在のところ、大崎上島2・生野島11、船島1・白島1・折免島1・長島1の17遺跡が確認されている。

次に、これらの諸遺跡の概要ならびに製塩土器など出土遺物について紹介することにする。

大 崎 上 島

大崎上島諸島の中核をなす最大の島であるが、製塩遺跡数は極めて少なく、西海岸南部の大崎町域において2遺跡が確認されているにすぎない。

長松遺跡(第1図16・広島県製塩土器出土地地名表および第5図51、以下同様とする)・瀬井遺跡(17・50)

いずれの遺跡でも小規模な海浜砂浜に遺物が散布するが、包含層の存在など詳細な内容は不明。製塩土器には、倒杯形脚台をもつ型式(古墳時代前半期)の土器がある。他に土師器、須恵器がある。

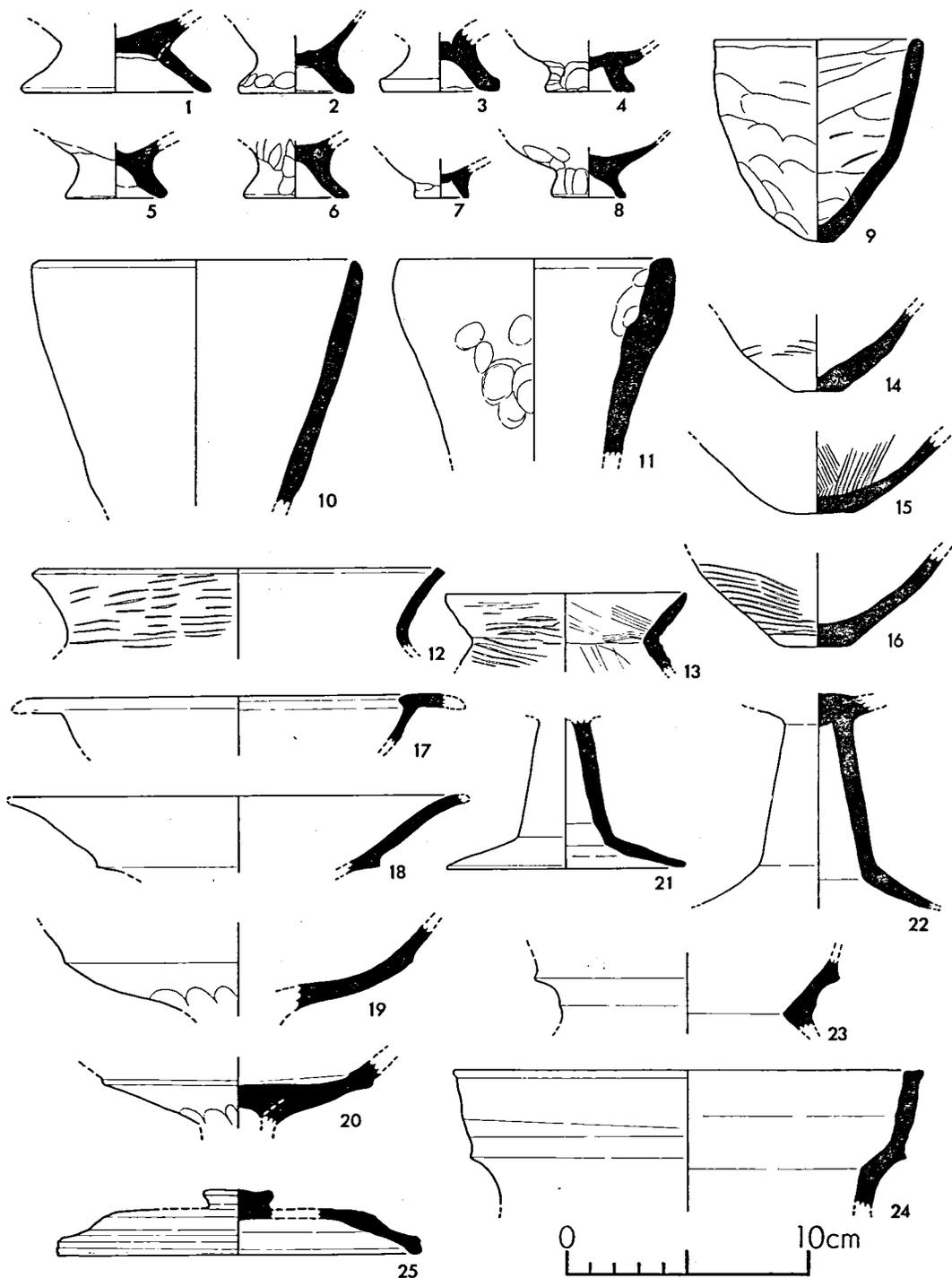
白 島

白島は南北に長く、西、東海岸には単調な海岸線が続き、多くは砂浜が形成されている。白島には、南端に近い西面する海浜砂浜に牛ヶ首遺跡がある。

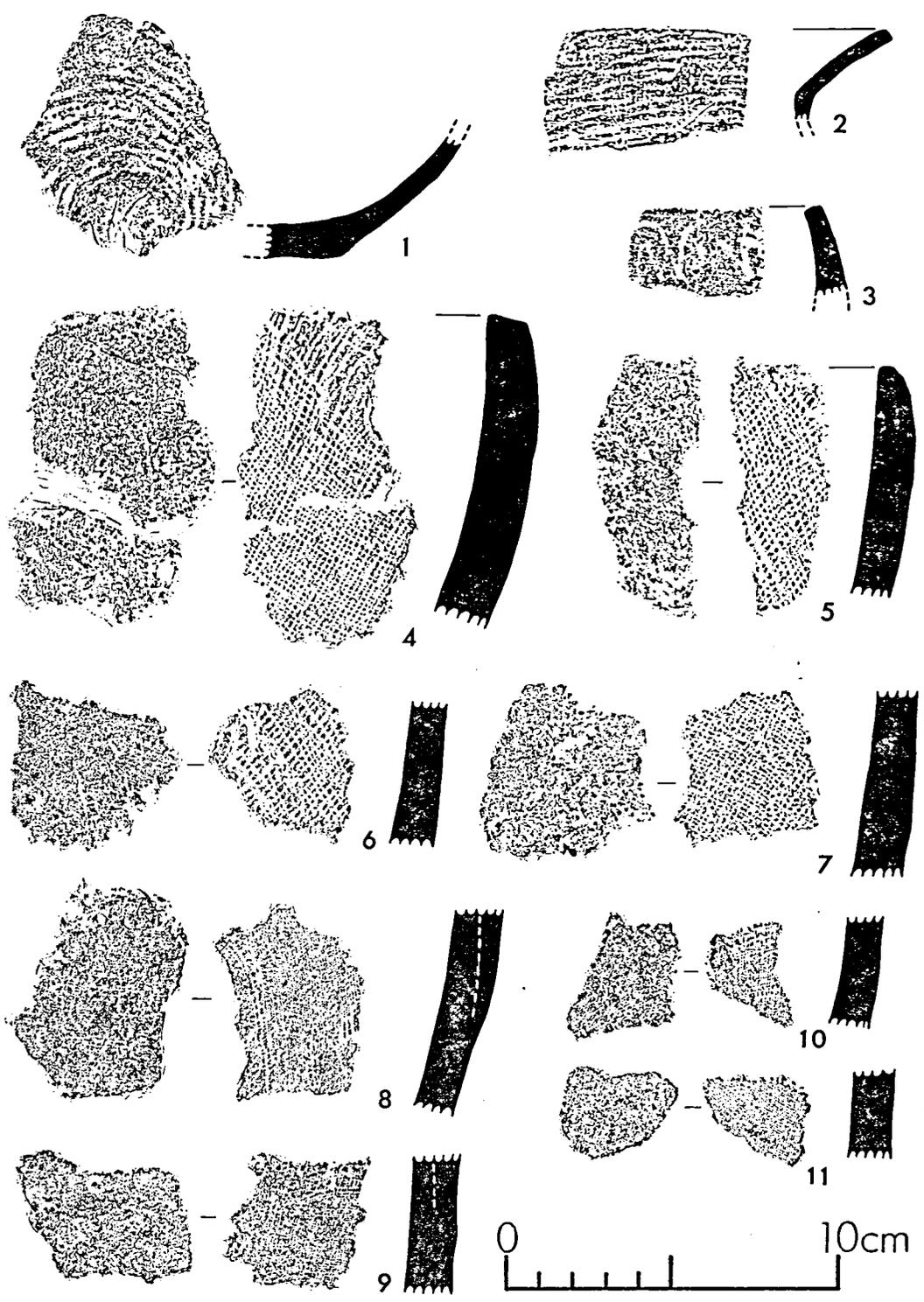
牛ヶ首遺跡(13・47)

遺跡は砂浜の形成された海岸のやや奥まった微高地にあるが、満潮時には水際から数mの距離となる。長さ約35mの範囲にわたって製塩土器が散布しているが、包含層は約10mほどの間にみられる。表土下0.3m前後で、厚さ0.4~0.5mの暗褐色土層となる。これが包含層で、土器細片がびっしり堆積しているが、海食作用で削られて背後に後退しつつある。製塩土器の他に弥生土器、土師器、須恵器などがある。

製塩土器には倒杯形脚台をもつ型式のものと厚手粗製の型式のものがある。この他に製塩土器と考えられるものに、器壁内面に布目痕をもつ厚手粗製型式の土器がある。第2図(1~8)は倒杯形脚



第2図 大崎上島諸島白島牛ヶ首遺跡出土遺物 (1)



第3圖 大崎上島諸島白島牛ヶ首遺跡出土遺物 (2)

台をもつもので、大作りの脚台・外ふんばりの強い厚手作りの脚台・小形の薄手作りの脚台に3分類できる。(1)が大形の脚台で、底径7.7cm・高さ1.8cmである。黄褐色を呈するが、磨耗が著しい。(2~6)が厚手作りの脚台をもつグループで、底径3.5~5cmである。黄白色を呈し、焼成は甘い。外面には指頭押圧痕が著しい。(7・8)が小形薄手作りの脚台をもつグループで、(底径・高さ)がそれぞれ(3cm・1cm)、(2.3cm・0.6cm)となっている。赤黄褐色を呈し、小砂粒を多く含む。外面には指頭押圧痕が残っている。

第2図(9~11)が厚手粗製型式の土器である。(9)はやや厚手作りの尖底をもつ土器で、口径8.5cm・高さ8.3cmの砲弾形をしている。淡黄褐色を呈し、小砂粒を多く含む。外面には指頭押圧痕が著しく、内面には横方向のヘラ削りの後、上下方向にナデている。(10)は口径13cm・現高10cmの先細形の土器である。器壁はやや薄手の作りで、口縁端は斜めに切落したように尖る。この手法は後述する布目痕土器に共通している。内、外面ともに茶褐色を呈し、細砂を多く含む。火を強くうけたためか、器壁外面はあれて剝離がひどい。(11)は口径11.2cmの土器で、口縁から8cmの部分が残存している。底部は不明であるが、先細形となっているので尖底に近い形態が考えられる。全体に厚手作りで、口縁部直下で1.3cmの厚さがある。口縁直下で最大径をとり、ここから急に先細形態となる。外面は淡茶褐色、内面は赤黄褐色を呈し、2~3mmの砂粒を多く含む、焼成は良好。部分的に赤化がみられ、二次的な火力をうけたとみられる。器壁の内、外面には指頭押圧痕が著しい。

第3図(4~11)が器壁内面に布目痕をもつ厚手粗製型式の土器である。口縁部近くの破片と胴部片がほとんどで、底部は全くみられない。口径は10~15cmに復元できるが、全高については不明である。口縁からやや先細となる傾斜をもつ。灰色と黄褐色を呈する2種がある。いずれも小砂粒を若干含む、焼成は良好。器壁は厚く、1.5cm前後の厚みをもつ。口縁端は斜めに切落したように尖る。部分的に赤化がみられ、二次的な火力をうけたとみられる。布目痕は口縁に対し、斜行して残る。(4・8)のように、口縁近くで織りのほつれたものや布の合せ目をもつものがある。布目には(8~11)のように細かい織りのものと、(4~7)のように粗い織りのものがある。前者では1cmあたり、経糸、緯糸がそれぞれ15本前後、後者では7~9本となっている。

臼島牛ヶ首遺跡出土の製塩土器の時期についてみると、倒杯形脚台をもつ型式の土器はほぼ古墳時代前半期に属するが、(7)のような小形の脚台をもつものは、他のものに比べてやや後出すると考えられる。厚手粗製型式の土器については、(9)のやや厚手作りの尖底型式の土器は、生野島かね遺跡群などの薄手尖底型式の土器と形態的に共通しており、ここでは古墳時代末~奈良時代としておきたい。(10)の土器は口縁の成形が布目痕土器と共通しており、布目痕土器とほぼ同時期としてよからう。(11)は外膨らみのある特徴的な口縁をもっている。これと共通した形態の土器は平城京域内遺跡¹⁾や布留遺跡²⁾などで出土しており、奈良時代後半~平安時代初頭に比定されている。布目痕をもつ厚手粗製型式の土器は、西部瀬戸内の下関市周辺の沿岸部および島嶼部で多量に出土しており、「六連島式土器³⁾」とされているものに共通する特徴をもつ。下関市筏石遺跡⁴⁾では、ほぼ全形を知ることのできるものがあり、口径10~15cm・高さ30~35cmの尖底に近い丸底円筒状の厚手粗製型式の土器である。内面には例外なく布目痕が残る。奈良時代後半~平安時代初期の土器が伴出している。広島県では、駅家跡とされている安芸郡府中町下岡田遺跡(付編地名表52)の井戸内から出土しており、やはり同時期の遺物が伴出している(第9図14)。臼島牛ヶ首遺跡では、下限を示す遺物に須恵器杯蓋(第2図25)があり、この形態的特徴は奈良時代後半~末頃の時期に属すると考えられるので、これら一連の厚手粗製型式の土器群は須恵器の示す時期に対応させてもよいと考えられる。なお、これらの厚手粗製型式の土器の用途については、平城京域内遺跡、布留遺跡、下岡田遺跡などの内陸に位置する遺跡から出土する例も多く、単なる製塩土器ではなく、焼塩生産用土器あるいは塩運搬容器としての用途も考えられよう⁵⁾。

弥生土器（第2図17, 第3図3）には高杯・壺がある。第3図(3)は壺の口縁部片で、複合口縁上部の屈曲させ立上がらせた部分に波状文を施す。終末頃に比定できよう。第2図(17)は口径約18cmの高杯口縁部で、赤褐色を呈し、金雲母を多く含む。焼成は良好。内面には横方向のヘラ磨きが施されている。九州的な形態をもち、中期に比定できよう。

土師器（第2図12~16, 18~24, 第3図1・2）には高杯・壺・甕などがある。第2図(18~22)に示す高杯は黄褐色~赤褐色を呈し、杯部は器壁内面にヘラ磨き、外面にナデを施す。中位にある段の稜は鋭い。脚部は(21)が底径9.8cmである。筒部はややエンタンス状に膨らむ。壺（第2図23・24）はいずれも口縁部片で、(23)は黄白色を呈する。(24)は口径19cmで、口縁部がやや外開きに高く立上がる。黄褐色を呈し、焼成は良好。磨耗しており、調整は不明。甕（第2図12~16, 第3図1・2）には口縁部と底部がある。第2図(12・13), 第3図(2)は「く」の字状に外反する口縁をもち、外面には口縁を含めて平行叩きが著しい。第2図(12)は外面が黒灰色、内面は黄白色を呈し、1~2mmの砂粒を多く含む。口縁部は「く」の字状に外反し、外面に平行叩きが著しい。内面は不定方向のナデ調整を施す。(13)は口径10cmで、黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。端部を尖り気味に仕上げた口縁部を含めて、外面には平行叩きが著しい。内面は、口縁部がナデ、体部はヘラ削りを施す。底部（第2図14~16, 第3図1）はすべて平底である。黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。外面には粗い平行叩きを施し、内面にはハケあるいはナデ調整がみられる。

製塩遺跡には丁寧な作りのものと粗製のものの2種の土師器が伴出することが多く、前者は日常生活用の土器、後者は製塩に関連した土器とみることができ。粗製の土師器は製塩土器に共通して、指頭押圧痕あるいは粗い平行叩き痕を残すもの、多量に砂粒を含むものが非常に多いという特徴をもち。広島県では、因島市大浜広島遺跡で住居址から一括して製塩土器、土師器、粗製土師器が出土している⁶⁾。小形化した脚台をもつ製塩土器に伴出する土師器、粗製の土師器は球形の体部をもち、器表の平行叩きも口縁、胴上半部あるいは胴中部に部分的に残り、他はハケで消している。ほぼ高島王泊5層土器群⁷⁾に相当するものである。白島牛ヶ首遺跡の土師器には、これらとほぼ同時期のグループとこれらより古い様相を示すグループがある。後者のグループは器表のほぼ全面に平行叩きを残り、平底をもつ一群の土器（第2図13~16, 第3図1）である。これらは中部瀬戸内東部の岡山県児島湾周辺に分布する、叩き技法を多用する一群の土師器に含めることができ、岡山県玉野市田井深山遺跡の酒津式に併行する一群の土師器に対比させることが可能である⁸⁾。したがって、白島牛ヶ首遺跡出土の土師器は古墳時代初頭を含めた古墳時代前半期に位置づけることができよう。

須恵器（第2図25）は口径14.8cm・高さ2.7cmの杯蓋で、円板に近い宝珠つまみをもつ。全体に磨耗しているが、奈良時代後半~末頃とすることができよう。

生野島

大崎上島諸島の中では大崎上島に次いで大きく、複雑に入組む海岸地形をもっている。現在11遺跡が確認されており、西部海岸ではかんね鼻の周囲に大がね遺跡・かんね1号遺跡(国実島海岸遺跡)・かんね2号遺跡、やや離れて草の浦遺跡の4遺跡がある。北部海岸の大きな入江となった月の浦湾では、月の浦3号遺跡・七谷遺跡の2遺跡がある。東部海岸には小馬取遺跡・大馬取遺跡・榎迫遺跡の3遺跡、南部海岸には観音浦遺跡・福浦遺跡の2遺跡がある。

かんね遺跡群 大がね遺跡(8・42)、かんね1号遺跡(9・43)、かんね2号遺跡(10・44)

大がね遺跡はかんね鼻東側の湾奥部の海浜砂浜にある。製塩土器のほか、弥生土器、土師器、石

斧、石鏃などが出土している。包含層は不明。かんね1号遺跡はかんね鼻西側の国実島海岸にある。長さ30m・奥行10mの砂浜に製塩土器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土錘などが散布している。須恵器には5世紀末頃の古い型式のものがある。かんね2号遺跡はかんね鼻の東側面にある。包含層の存在が伝えられるが、現在は不明となっている。満潮時にはほとんど水没する。かんね遺跡群の製塩土器には、倒杯形脚台をもつ型式（古墳時代前半期）と薄手尖底型式（古墳時代末～奈良時代）の2型式の土器がある。第4図（2）は倒杯形脚台をもつもので、底径3.4cm・高さ1.2cmの脚台である。外面は黄白色、内面は黒色を呈し、焼成は良好である。上部の深鉢は下底部を残すだけとなっているが、外面には左下りの平行叩きを施している。脚台はやや薄く仕上げ、指頭押圧痕が横に連続している。他に、（底径・高さ）が（5.5cm・1.3cm）、（4.7cm・1.5cm）、（4.5cm・1.3cm）の脚台がある。第4図（3・4）は薄手尖底型式の土器で、底部破片が多い。いずれも暗褐色を呈し、細砂を多く含む。焼成は良好であるが、二次的火力をうけたためか表面の荒れがひどい。

草の浦遺跡（11・45）

西部海岸の小さな入江湾奥部の海浜にある。製塩土器の他に、土師器、須恵器、土錘などが散布している。現在、海食作用によって遺跡地は削られ、ほとんど消失している。製塩土器には倒杯形脚台をもつ型式（古墳時代前半期）のものがある。

月の浦3号遺跡（1・35）

月の浦湾の西岸にあって、海岸にある高さ約2mの崖の下層に包含層が露出している。包含層は、長さ約20m・奥行約10mにわたって約1mの厚さがある。焼土層、灰層を含み、下層には製塩土器の細片がびっしり堆積している。製塩土器は古墳時代末～奈良時代の薄手尖底型式の土器で、他に土師器、須恵器、土錘などがある。第4図（1）は厚さ1.6cmの底部破片で、茶褐色を呈し、焼成は堅緻である。器壁は薄く、尖底部分がやや潰れている。

七谷遺跡（2・36）

月の浦湾の最も奥まった地点にあり、以前には海岸崖面に長さ約10m・奥行約5mの包含層が存在したといわれる。現在は堤防が建設されていて、海浜砂浜に少量の土器が散布している。製塩土器、弥生土器、土師器、須恵器、土錘などがある。製塩土器は、直立口縁に丸底をもつ型式（古墳時代後半期）と薄手尖底型式（古墳時代末～奈良時代）の2型式がある。前者の直立口縁の丸底型式の製塩土器は、大崎上島諸島では他に確認されていない。月の浦湾では古墳時代前半期の倒杯形脚台をもつ型式の製塩土器がなく、他の遺跡より遅れて製塩活動が開始されたい。

小馬取遺跡（3・37）

南北に長い東部海岸の北端近くの海浜にある。長さ25m・奥行約10mの範囲に製塩土器が散布している。他に縄文土器、弥生土器、石匕などがある。包含層が確認されていて、地表下約0.5～0.7mに厚さ0.2mの暗褐色土層があり、これが包含層となっている。製塩土器には倒杯形脚台をもつ型式（古墳時代前半期）、小形化した脚台をもつ型式（同）、薄手尖底の型式（古墳時代末～奈良時代）の3型式がある。第4図（5）は底径4.7cm・高さ15cmの脚台をもち、上部の深鉢の下底部が残る。淡赤褐

色を呈し、小砂粒を含む。深鉢内面には凹凸が多く、脚台外面には指頭押圧痕が連続してついている。小形化した脚台は、(底径・高さ)が(2cm・0.8cm)、(1.8cm・0.5cm)、(1.4cm・0.8cm)である。第4図(6)は薄手尖底型式の土器で、胴下部から底部までの現高4.8cmの破片である。茶褐色を呈し、焼成は良好である。外表は二次的火力をうけて赤化している。小砂を多く含み、器壁内、外面には指頭押圧痕が著しい。

大馬取遺跡(4・38)

小馬取遺跡の南約2Kmの海浜にあり、長さ約50m・奥行約29mの範囲に製塩土器が散布する。他に縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石斧、石鏃などが出土している。現在、みかん畑となっている部分の表土下0.3mで、0.2~0.3mの暗褐色を呈した包含層がある。製塩土器には倒杯形脚台をもつ型式(古墳時代前半期)と薄手尖底型式(古墳時代末~奈良時代)の2型式がある。

榎迫遺跡(5・39)

大馬取遺跡から南1Kmの海浜にある。長さ約50mの海浜砂浜に製塩土器が散布しており、他に縄文土器、弥生土器、土師器、石鏃などがある。製塩土器には倒杯形脚台をもつ型式(古墳時代前半期)と厚手粗製型式(奈良時代後半~平安時代初期)の2型式がある。後者の土器は口縁から胴部にかけての破片で、現高約10cmである。口縁直下で膨らみをもち、1.5cmの厚みをもつ。白島牛ヶ首遺跡出土の厚手粗製土器に共通する形態をもつ。

観音浦遺跡(6・40)・福浦2号遺跡(7・41)

南海岸の入組んだ湾奥の小規模な海浜にある。いずれの遺跡も崖に包含層が露出していたが、現在は不明となっている。製塩土器、土師器などが出土している。製塩土器は倒杯形脚台をもつ型式(古墳時代前半期)のものである。

船 島

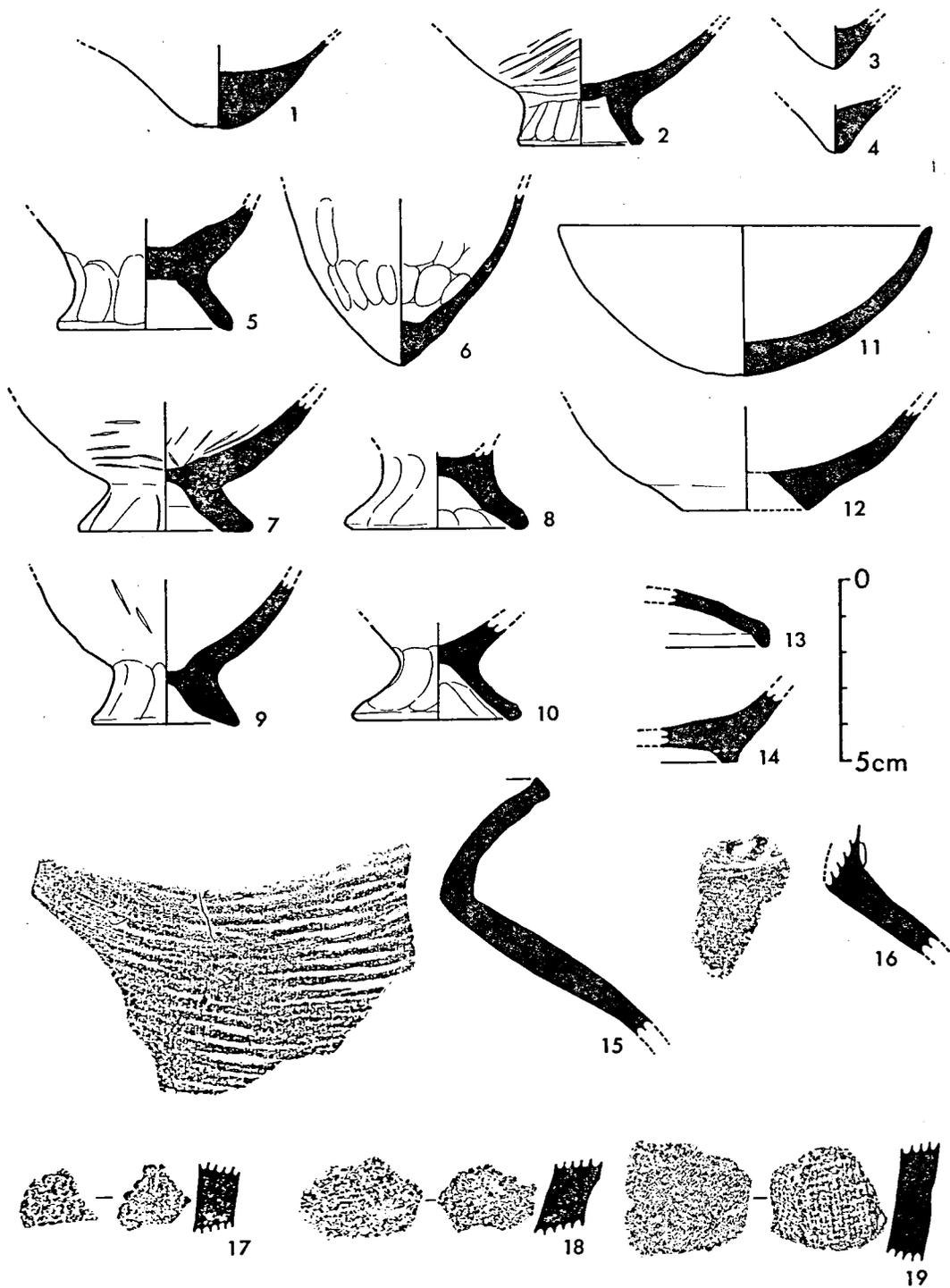
生野島の南にある小島で、東北端に近い小規模な海浜に船島2号遺跡がある。

船島2号(高島パール作業所内)遺跡(12・46)

海浜に位置する真珠養殖作業所内の井戸掘削中に製塩土器、土師器が出土している。製塩土器は倒杯形脚台をもつ型式(古墳時代前半期)の土器である。脚台は、(底径・高さ)が(4~5cm・1~1.5cm)である。土師器は細片であるが、胴部に粗い平行叩きを施す。

折 免 島

白島の南約0.5Kmにある小島であるが、小さな湾入が多く形成されている。製塩遺跡は折免島南遺跡があるが、他に古墳数基が立地する遺跡の多い島である。



第4圖 大崎上島諸島出土遺物（1～6 生野島，7～16折免島，17～19長島）

折免島南遺跡 (14・48)

西海岸の海浜にあり、長さ約10mの範囲に製塩土器、弥生土器、土師器、須恵器などが散布している。包含層は、現在海食作用でほとんど失われている。製塩土器は倒杯形脚台をもつ型式（古墳時代前半期）の土器がある。第4図（7～10）に示すように、脚台の（底径・高さ）は、（7）が（4.7cm・1.2cm）、（8）が（5cm・1.5cm）、（9）が（4cm・11.4cm）、（10）が（4.6cm・1.5cm）である。黄褐色～赤褐色を呈し、1mmの砂粒を多く含む。脚台の内、外面には指頭押圧痕が著しい。深鉢下底には横方向あるいは縦方向に平行叩きが施されている。脚台には（7～9）のように厚手作りのものと、（10）のように薄手作りのものがみられる。

弥生土器（第4図16）には壺がある。（16）は頸部破片で、刻み目を施す突帯をめぐらす。灰褐色を呈し、小砂粒を多く含む。磨耗しており、調整は不明。中期後半に比定できる。

土師器（第4図11・12・15）には腕、甕がある。（11）の腕は口径10.2cm・高さ4.1cmで、黄白色を呈し、焼成は良好である。外面はナデ、内面はヘラ磨きを施す。（12）は焼成前に底部に穿孔を施した土器であるが、器形は不明。黄褐色を呈し、焼成は良好。外面、内面ともにナデ調整を施す。（15）の甕は大きく「く」の字状に外反する口縁をもつ。淡赤褐色を呈し、焼成も良好である。口縁の内、外面は横ナデ調整、胴部外面は粗い平行叩きを施し、内面はヘラによる押えが著しい。この他に複合口縁をもつ甕があり、頸部から「く」の字状に外反する口縁の上部を、1cmほどやや内傾気味に屈曲させたものである。土師器は4世紀～5世紀前半頃に比定できるもので、脚台をもつ製塩土器に対応するものである。

須恵器（第4図13・14）には杯蓋と杯身がある。（13）の杯蓋は口径約17cm、（14）の杯身は底径8cmに復元できる。奈良時代後半～平安時代初頭に比定できよう。

長 島

大崎上島の周辺諸島では生野島について大きい。現在のところ、製塩遺跡は布浦遺跡だけが確認されている。

布浦遺跡 (15・49)

西海岸の小さな入江の湾奥にあって、背後に谷をひかえた微高地にある。製塩土器、土師器、須恵器などが散布している。製塩土器には倒杯形脚台をもつ型式（古墳時代前半期）の土器と布目痕をもつ厚手粗製型式（奈良時代後半～平安時代初期）の土器がある。第4図（17～19）が布目痕をもつ厚手粗製土器で、白島牛ヶ首遺跡出土例とほぼ共通した特徴をもつ。灰色～黄褐色を呈し、小砂粒を含み、焼成は良好である。布目には、（17）の細かい織りと（19）の粗い織りがある。（18）は磨耗しており、不明である。

須恵器は宝珠つまみをもち、高台のつく型式の杯がみられる。

註

- 1) 亀井伸雄編『平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 1979
- 2) 山内紀嗣編『布留遺跡仙之内木堂方地区発掘調査概要』布留遺跡天理教発掘調査団 1981
- 3) 小野忠熙「筏石遺跡」『山口県文化財概要』第4集 埋蔵文化財 山口県教育委員会 1961
- 4) 3) に同じ。

- 5) 岩本正二「製塩土器の分布と流通」考古学研究 第27巻第2号 考古学研究会 1980
- 6) 広島大学文学部考古学研究室で1966(昭和41)年に発掘調査を実施した。
- 7) 坪井清足編『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』岡山県高島遺跡調査委員会 1956
- 8) 間壁忠彦「玉野市田井深山遺跡」『倉敷考古館研究集報』第6号 倉敷考古館 1969

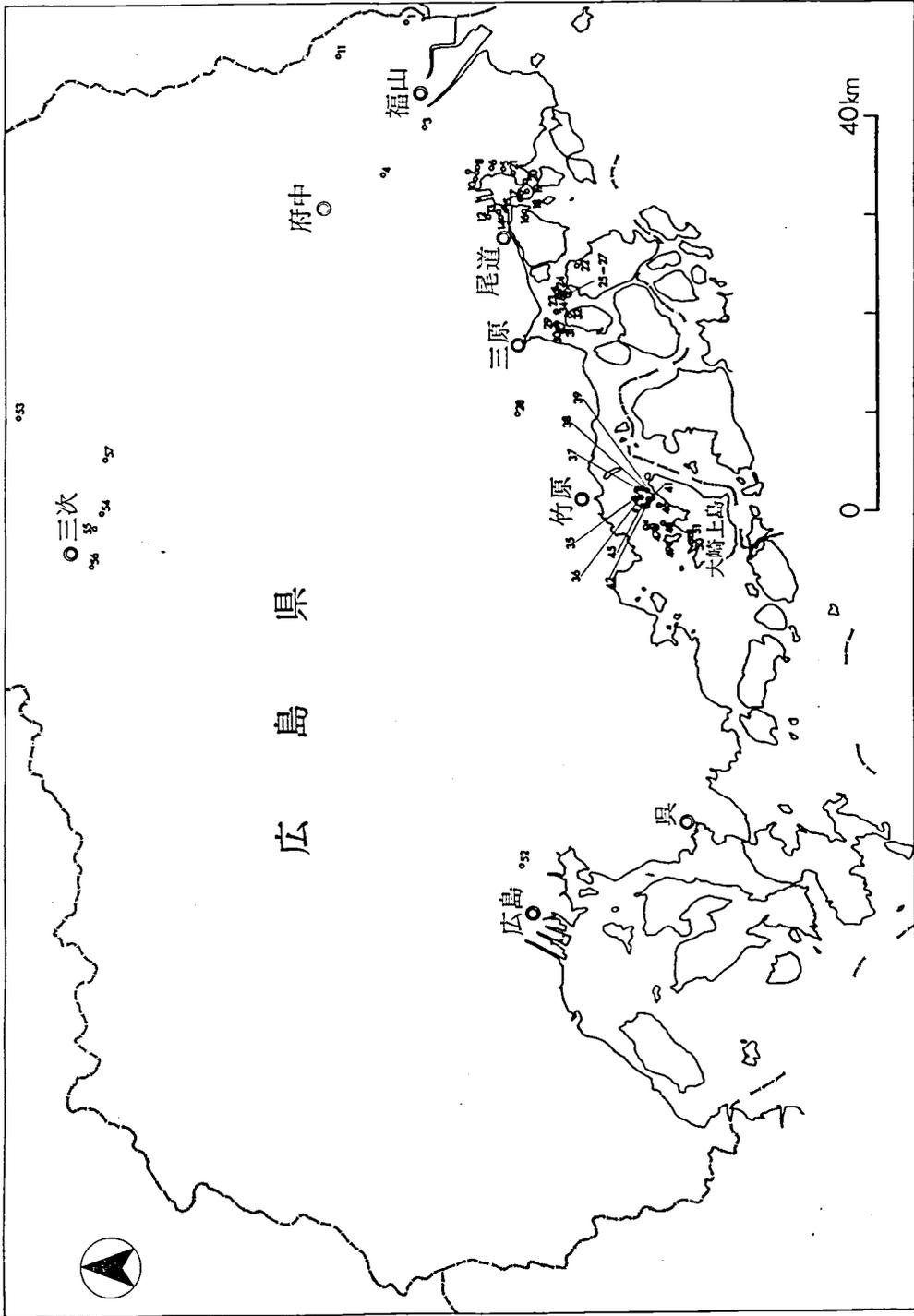
4. ま と め

中部瀬戸内東部の備讃島嶼部では、香川県喜兵衛島遺跡などの発掘調査によって、製塩土器の編年の大筋がほぼ確立している。ここでは、弥生時代中頃に土器製塩が開始されているが、古墳時代以降の各型式を列挙してみる¹⁾と、①ワイングラス状深鉢に倒杯形脚台のつく型式 ②脚台がより小型化した型式 ③脚台が消失し、薄手丸底の型式 ④直立口縁をもつ丸底の型式 ⑤薄手尖底の型式の5型式となる。今、仮に古墳時代以降の製塩土器①～⑤型式をⅠ～Ⅴ型式とあらわすと、大まかにみて、Ⅰ・Ⅱ型式が古墳時代前半期(4世紀～5世紀前半)、Ⅲ型式が古墳時代前半期末～後半期前半(5世紀末～6世紀前半)、Ⅳ型式が古墳時代後半期後半(6世紀後半)、Ⅴ型式が古墳時代末～奈良時代(7世紀～8世紀前半)とみることができる。備讃島嶼部の土器編年が、広島県島嶼部にすぐあてはまるものかどうかは今後の検討が必要であり、型式の細分も考慮せねばならないが、大崎上島諸島の製塩土器をみると、現在のところ、弥生時代に属する製塩土器は確認されてなく、各遺跡ともほぼ共通して、古墳時代前半期に位置づけられる倒杯形脚台をもつⅠ型式の土器による製塩から開始されているようである。臼島牛ヶ首遺跡出土土器には古墳時代初頭のものが含まれるので、今後、Ⅰ型式の脚台の細分が必要となろう。Ⅱ型式の製塩土器は生野島・臼島・長島の各遺跡で認められる。Ⅲ型式の製塩土器は、今のところ確認されていない。Ⅳ型式の製塩土器は極めて少ない。Ⅴ型式の製塩土器は多くの遺跡で出土しており、厚い包含層の大半はこの土器で占められているようである。大崎上島諸島では、以上の5型式の製塩土器の他に、奈良時代後半～平安時代初期の厚手粗製の型式の製塩土器と器壁内面に布目痕のつく製塩土器が、臼島・長島などで出土している。

したがって、大崎上島諸島では遺跡数の消長、製塩土器の出土量を参考にすると、現在のところ古墳時代前半期と古墳時代末～奈良時代の2時期に、土器製塩の最盛期を迎えていることがわかる。奈良時代後半～平安時代初頭にも連続して土器製塩が行なわれていたことも窺えるが、遺跡の急激な減少をみると、これ以降、大崎上島諸島では土器製塩活動が衰退、消失していく。

ここで、広島県瀬戸内沿岸部および島嶼部における製塩土器を出土する遺跡についてみると、現在のところ、第5図の分布図および地名表にみられるように、60遺跡に近い。今、その分布状況を見ると、①竹原湾沖合いの大崎上島諸島(17遺跡) ②三原湾沖合いの因島周辺諸島(13遺跡) ③松永湾岸(13遺跡) ④福山湾岸(3遺跡)の4地域に大別できる。これらの4地域における製塩遺跡の時期的な変遷をみると、すべての地域で古墳時代前半期からⅠ型式の土器を用いた製塩活動が開始されている。古墳時代後半期になると、東部の松永湾岸、福山湾岸地域ではⅣ型式の土器を用いた製塩活動が盛期を迎えるのに対して、西部の大崎上島諸島では、逆に衰退している。Ⅴ型式の土器を用いる古墳時代末～奈良時代には、大崎上島諸島で盛期を迎え、再び逆転する状況を知ることができる。したがって広島県域では、4つのそれぞれの地域が、衰退した時期については他の地域で盛期を迎えるなど相互補完の関係にあり、塩の供給に支障のない状況が窺える。

大崎上島諸島では出土遺物からみる限り、古墳時代後半期の6世紀代を通して製塩活動が一時的に衰退する。この原因については、製塩活動の中心地である備讃島嶼部ではこの時期に最盛期を迎えており、この地域により近い松永湾岸、福山湾岸地域の位置する備後地方を中心に、製塩体制の再編成がなされた可能性が考えられる。この後、大崎上島諸島では古墳時代末～奈良時代に再び盛期を迎えるが、この時期から備讃島嶼部など製塩の中心地域では、一定の面積をもった自然浜利用の塩田の開



第5図 広島県製塩土器出土分布図（番号は地名表に一致する）

発、また大形の土鍋、石鍋を用いた煮沸煎熬法など新しい製塩方法が成立し、製塩体制が根本的に再編成されつつあった²⁾。大崎上島諸島の複雑に入組んだ小規模な海浜では、このような製塩法は不可能で、依然V型式の薄手尖底土器による土器製塩、次いで厚手粗製土器による製塩が継続されたが、このような小規模な製塩が経済的に成立しなくなったのは当然のことで、奈良時代以降、急激に衰退していかなざるをえなかったのであろう。また、このような製塩活動の時期的な盛衰の要因の一つに燃料の問題がある。土器製塩には多量の燃料が必要であり、とりわけ、大崎上島諸島では臼島、折免島など小島での製塩が中心で、燃料供給が時期的な盛衰に大きくかかわっていたことが考えられる。

次に、製塩遺跡群とほぼ同時に成立している古墳については、大崎上島諸島では折免島のような小島においてさえも箱式石棺あるいは小規模な横穴式石室をもつ古墳が存在する。これらの古墳の被葬者の性格は、やはりその位置的特徴からみても製塩あるいは漁業、航海業を生業とする小規模な集団を管理する立場にあった人物とすることができよう。特に土器製塩作業は農繁期と重複するので、このような海に依存する専業集団の内部から、古墳築造階層が出現してきた可能性は十分に想定できる。

今回の報告にあたっては、広島大学文学部考古学研究室 潮見 浩・川越哲志・河瀬正利先生、広島県教育委員会文化課 小都 隆・桑田俊明氏の御指導・御教示をうけ、現地調査では東野町公民館長 福本 清氏には絶大なる御高配を賜わった。また遺物の実測、拓影作成ならびに図面製図には河瀬正利先生、広島大学大学院学生 中越利夫・藤野次史・小池伸彦・土佐雅彦・山崎やよい各氏の御協力をうけた。文末ではあるが、記して篤く御礼を申しあげる。

註

- 1) 近藤義郎編『日本塩業大系』史料編 考古 日本塩業研究会 1978
- 2) 近藤義郎・渡辺則文「製塩技術とその時代的特質」『日本の考古学』Ⅳ 歴史時代 上 河出書房 1967

付編 広島県製塩土器出土地地名表および主要遺跡概要

藤野次史

広島県製塩土器出土地地名表

番号	遺跡名	所在地	型式			伴出遺物	時期	備考	文献
			A	B	C				
1	大門貝塚	福山市大門町津之下					※	(6)	
2	津之下貝塚	" "					所在地不明	(1)	
3	ザブ遺跡	" 津之郷町大字坂部	○	○		土師器, 須恵器, 鉄鍬	広島県教育委員会発掘(1970~1971)尖洲図あり	(10)	
4	福田地遺跡	" 芦田町大字有地	○			土師器	広島大学河瀬正利氏教示		
5	二番組貝塚	" 藤江町					※	(5)	
6	天津貝塚	" 金江町天津	○	?			尖洲図あり	(5)	
7	浜上遺跡	" "		○			広島県教育委員会 桑田俊明氏教示		
8	馬取貝塚	" 柳津町馬取	?	○		土師器, 須恵器, 土埴	村上正名(1938), 馬取遺跡発掘調査団(1958)発掘, 尖洲図あり	(4) (5) (10)	
9	下迫貝塚	" " 市場	○	○			村上正名発掘(1938)尖洲図あり	(1) (5) (10)	
10	市場貝塚	" " "	○	○		土師器, 細文土器	尖洲図あり	(5) (10)	
11	神辺御領遺跡	深安郡神辺町大字下御領	○			弥生土器, 土師器	広島県教育委員会 桑田俊明氏教示		
12	大田貝塚	尾道市高須町大字出口字竹之端	○			土師器, 須恵器	広島県教育委員会発掘(1964)尖洲図あり	(8) (10)	

13	今 免 遺 跡	尾道市山波町497番地	○	○	土師器, 須恵器	前～後前半	実測図あり	(12)
14	広塚2号古墳	〃 〃 廻り田		○	土師器, 須恵器, 銀環, 鉄片	後後半	広島県教育委員会発掘 (1974) 実測図あり	(12)
15	尾道造船所内遺跡	〃 〃 〃	○			前		
16	古江浜貝塚	〃 向東町字古江浜	○		縄文土器(後), 石鏃, 貝類, 獣骨他	前	尾道市教育委員会発掘 (1978) 実測図あり	(12)
17	本 浦 遺 跡	〃 浦崎町	○			前		(9)
18	戸 崎 遺 跡	〃 〃 戸崎					※	(9)
19	長者ヶ原遺跡	〃 〃 〃		○	須恵器, 紡錘車, 石斧	後前半		(9)
20	大 島 遺 跡	〃 〃 満越	○	○		前～後	実測図あり	(12)
21	串 の 浜 遺 跡	〃 〃 下組串の浜	○			前		
22	大浜広島遺跡	因島市大浜町倉谷	○		土師器	前末	因島市教育委員会(1965), 広島大学 (1966) 発掘, 実測図あり	(7) (11)
23	細 島 I 遺 跡	〃 重井町細島		○		後前半		(1) (2)
24	細 島 II 遺 跡	〃 重井町細島		○		後前半		(1) (2)
25	小細島 I 遺跡	〃 〃 小細島					※	(1) (2)
26	小細島 II 遺跡	〃 重井町小細島					※	(1) (2)
27	小細島 III 遺跡	〃 〃 〃					※	(1) (2)
28	兜山北古墳	三原市沼田東町納所字山崎		○	刀子, 鉄鏃, 鉄刀片他	後前半	広島大学所蔵 実測図あり	

29	北浦遺跡	三原市鷺浦町小佐木島北浦					土師器, 須惠器, 縄文土器(後)		※	(1)(2)(3)(4)
30	清水谷遺跡	" " " 清水谷					土師器, 須惠器		※	(1)(2)(3)(4)
31	西谷遺跡	" " " 西谷					土師器, 須惠器		※	(1)(2)(3)(4)
32	須波遺跡	" " " 佐木島須波							※	(4)
33	佐木島東遺跡	" " " (東岸)							※	(4)
34	宿禰島遺跡	" " " 宿禰島					縄文土器, 搔器, 剥片(安山岩)			(2)(4)
35	月の浦3号遺跡	豊田郡東野町生野島月の浦			○		土師器, 須惠器, 土錘	後後半	尖測図あり	(3)(4)
36	七谷遺跡	" " " 七谷			○		弥生土器	後		(3)(4)
37	小馬取遺跡	" " " 小馬取			○		縄文土器, 弥生土器, 石匙	前~後	尖測図あり	(1)(3)(4)
38	大馬取遺跡	" " " 大馬取			○		土師器, 土錘, 縄文土器, 弥生土器, 磨製石斧	前~後		(1)(3)(4)
39	榎迫遺跡	" " " 榎迫			○		土師器, 縄文土器, 弥生土器, 石鏃	前, 奈良末~平安		(1)(3)(4)
40	観音浦遺跡	" " " 観音浦			○		土師器	前		(3)(4)
41	福浦2号遺跡	" " " 福浦			○		土師器	前		(3)(4)
42	大がね遺跡	" " " 大がね			○		縄文土器	前~後		(1)(3)
43	かんね1号遺跡	" " " "			○		土師器, 須惠器, 土錘, 縄文土器(後), 弥生土器(後)	前~後		(4)
44	かんね2号遺跡	" " " "			○			前~後		(3)

45	草の浦 1号遺跡	豊田郡東野町生野島草の浦	○			土師器, 須惠器, 土鍬	前		(3) (4)
46	船島2号(高島六ヶ所内)遺跡	〃 〃 船島柳浦	○			土師器	前		(4)
47	牛ヶ首遺跡	〃 〃 白鳥牛ヶ首	○	○		弥生土器, 土師器, 須惠器	前, 奈良末~平安		
48	折免島南遺跡	〃 〃 大崎町折免島	○			弥生土器, 土師器, 須惠器	前		
49	布浦遺跡	豊田郡大崎町長島布浦	○	○		土師器, 須惠器	前, 奈良末~平安		(3) (4)
50	瀬井遺跡	〃 〃 中野	○				前		
51	長松遺跡	〃 〃 〃	○				前		
52	下岡田遺跡	安芸郡府中町城ヶ丘		平底布目		土師器, 須惠器, 高麗青磁, 瓦他	奈良後半~末	府中町教育委員会発掘(1963~1967)実測図あり	
53	大成遺跡	庄原市三日市町大学大成	○			須惠器, 土師器, 柄の羽口, スラグ他	後前半	広島県教育委員会 桑田俊明氏教示	
54	高杉町所在遺跡	三次市高杉町						※	(1)
55	三次工業団地内松ヶ迫遺跡F地点	〃 酒屋町東酒屋	○			須惠器, 土師器他	後半	広島県教育委員会 桑田俊明氏教示	
56	船所遺跡	〃 酒屋町船所						※	(1)
57	皆瀬遺跡	双三郡三良坂町皆瀬				土師器, 須惠器, 弥生土器(前), 石, 石匙, 石鏝		※	(1) (4)

凡例 型式 A:台脚を有するもの

B:丸底

C:尖底

なお、型式の認定にあたっては、広島大学卒業の佐伯博司氏の教示によるものが多い。

時期 前:古墳時代前期

後:古墳時代後期

備考 ※印は出土の記録があるだけで遺物の現存は確認されていない。

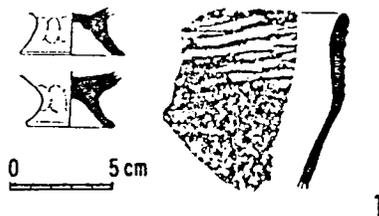
広島県製塩土器出土地地名表文献

- (1) 府中高校地歴部「師楽式土器発見地名表」『芸備文化』第1号 1955
- (2) 近藤 正「島の遺跡」『芸備文化』第1号 1955
- (3) 豊 元国／近藤 正「生野島及び隣接諸島嶼の考古学的調査」『芸備文化』第10・11合併号 1958
- (4) 広島県教育委員会『広島県文化財包蔵地地名表』1961
- (5) 松崎寿和／潮見 浩／木下 忠／藤田 等／本村豪章「松永市馬取遺跡調査報告」『広島県文化財調査報告』第4集 1963
- (6) 村上正名『福山市史』上巻 1963
- (7) 潮見 浩「因島市大浜広島遺跡の発掘調査」『広島県文化財ニュース』第31・32合併号 1966
- (8) 潮見 浩／川越哲志／河瀬正利「大田貝塚」『広島県文化財調査報告』第9集 1971
- (9) 青木 茂『新修尾道市史』第1巻 1971
- (10) 伊吹 尚／河瀬正利／小部 隆／中田 昭「ザブ遺跡」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』1973
- (11) 近藤義郎『日本塩業大系』史料編 考古 1978
- (12) 尾道市文化財協会埋蔵文化財部『尾道市文化財報告』1979

広島県における製塩土器出土主要遺跡概要

ザブ遺跡（第5図・地名表3，第6図1）

福山市津之郷町大字坂部に所在する。遺跡の東を流れる本谷川によって形成された扇状地に立地し，現在の福山市街地が沖積化する以前には福山湾を東南に展望できたものと思われる。1970～71年に2回にわたって広島県教育委員会により発掘調査が行なわれており¹⁾，F区などから須恵器・土師器，鉄鏝などと共に製塩土器が検出されている。製塩土器はいずれも破片で，倒杯形の台脚を有する型式のものと口縁が直立気味で胴部が底部に向ってすぼまるやや特異な形態の型式のものが存在する。前者は指頭圧痕が顕著であり，後者は口縁部付近に平行のたたき目を有する。伴出の土師器・須恵器は5世紀～6世紀代のものである。



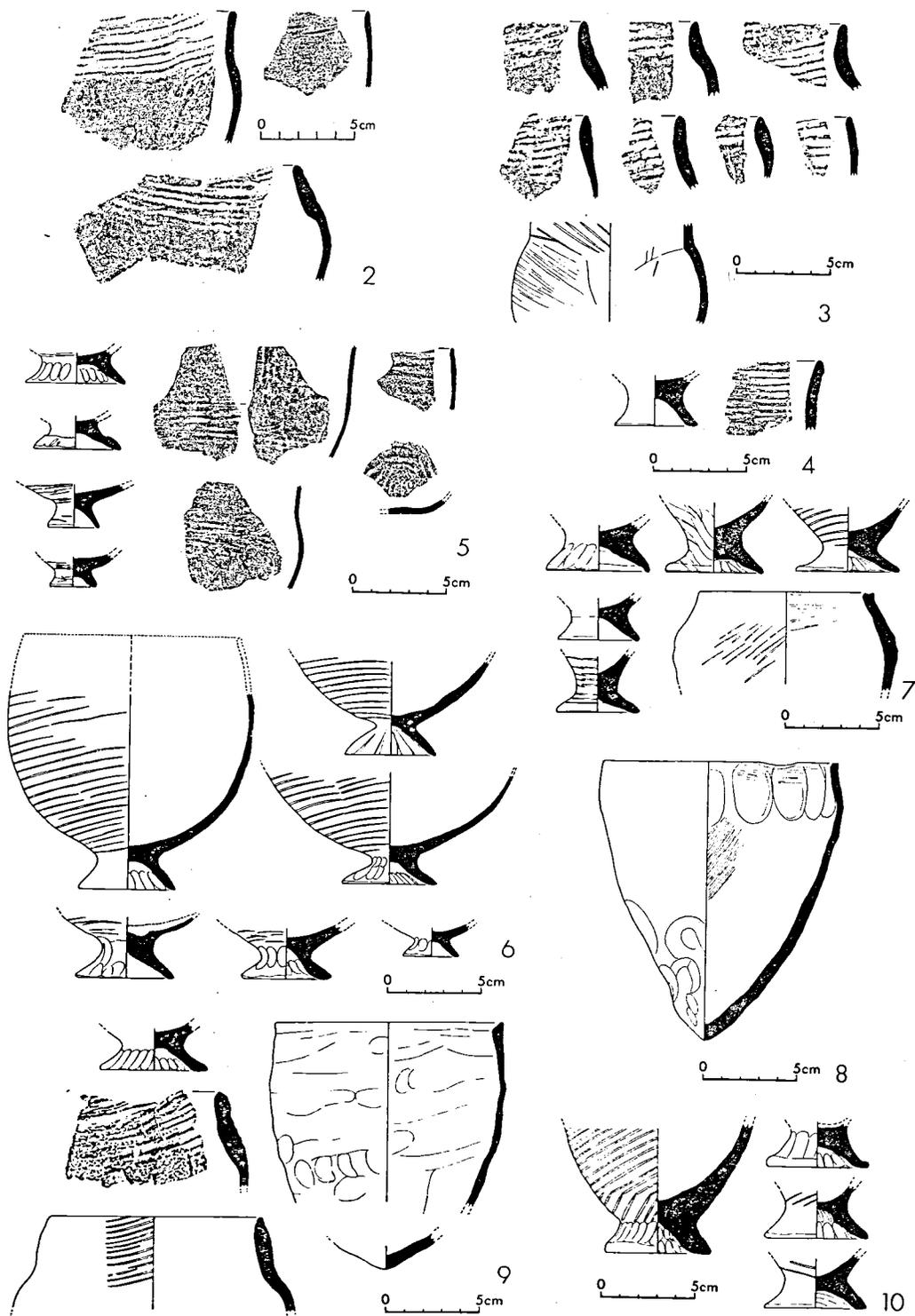
第6図 広島県出土製塩土器(1) (1.ザブ遺跡)
(文献10より転載)

天津貝塚（第5図・地名表6，第7図2）

福山市金江町天津に所在する。松永湾を西に望み，東から西へのびる低丘陵の裾に立地する。若干の製塩土器が採集されており，立ち気味の口縁でやや胴が張り，丸底に終わると考えられるものと薄手で胴部はやや張り気味のゆるいカーブをもち丸底に終わると考えられるものが存在する。前者は口縁部付近に平行のたたき目を有し，口縁がやや内傾するものと直立気味のものが存在する。後者にはたたき目は存在しない。

馬取遺跡（第5図・地名表8，第7図3）

福山市柳津町馬取に所在し，松永湾を西に望む標高10mの低い台地状の丘陵に立地する。発掘調査



第7図 広島県出土製塩土器 (2) 2.天津貝塚 3.馬取貝塚 4.下迫貝塚 5.市場遺跡
6.大田貝塚 7.今免遺跡 8.広塚第2号古墳 9.大畠遺跡 10.古江浜貝塚

は古く1938年²⁾より行なわれているが、1958年の馬取遺跡発掘調査団による発掘調査の際、製塩土器が検出されている³⁾。製塩土器は須恵器・土師器・土錘などと共に、表面採集もしくは包含層上層より出土したが、一つの包含層としては形成されていない。製塩土器はいずれも小片で全形を窺えるものはほとんどないが、3型式に分類が可能である。一つはワイングラス状の胴部をもち台脚を有すると考えられるもので、小片で全形を推定することは困難だが、器壁が薄くややふくらみをもちながら底部に向ってゆるやかなカーブを描くことからその可能性が強い。一つは口縁が直立気味で肩が張り丸底に終わると考えられるもので、平行のたたき目を有するが、口縁部周辺にはほぼ限られる。器壁の厚さは口縁・胴部ともほぼ一定である。今一つは口縁がやや内傾気味で肩の張りが弱く、胴中央に最大径をもち丸底に終わると考えられるもので、口縁～肩部に平行のたたき目を有する。口縁部器壁の厚さが厚く、肩から胴部にかけて急速に厚さを減じる。この型式には、肩の張りがやや強いものと肩部がほとんどなくふくらみ気味の胴部をもつものがある。形式的には、上述の順で新しくなる。出土の土師器は6世紀後半～7世紀のものが主体になり、製塩土器の一部の型式とはズレがある。

下迫貝塚（第5図・地名表9、第7図4）

福山市柳津町市場に所在する。松永湾を西に望む標高10mの西南にのびる低丘陵に立地し、1938年に村上正名氏によって部分的な発掘調査が行なわれている⁴⁾。層序は、第1層表土、第2層製塩土器包含層、第3層製塩土器と貝を含む有機土層、第4層貝層、第5層礫、貝、縄文土器を含む有機土層となっており、第6層から主として縄文土器が出土したと言われる。製塩土器には、倒杯形の台脚を有しワイングラス状の胴部をもつと考えられるものと口縁部付近に平行のたたき目を有し口縁が直立気味でやや胴が張り丸底に終わると考えられるものの2型式が存在する。前者が第3層の、後者が第2層の出土製塩土器に対応する可能性が強いが、型式と層位の対応関係は明らかにされていない。

市場貝塚（第5図・地名表10、第7図5）

福山市柳津町市場に所在する。松永湾を西南に望み、標高約10mの丘陵末端もしくは微高地に立地するらしい。1959年に遺跡内に井戸を掘った際、遺物が出土した⁵⁾。石井右衛門氏の記録によれば、第1層埋土（表土）、第2層土器層（製塩土器・縄文土器などの混在層）、第3層粘土層、第4層バラ石層（礫層）、第5層岩盤の層序になると言う。第2層は奥田川の沖積土であるらしい。製塩土器は大きくは2つの型式が存在する。一つは倒杯形の台脚を有しワイングラス状の胴部をもつものである。ほぼ胴部全面に平行のたたき目を有し、器壁は薄い。台脚は広がり気味のものと小形でやや直立気味のものが存在し、形式的には前者が後者に先行する。今一つは口縁が直立気味でやや胴が張り、平底に近い丸底に終わる型式のものである。形式的には台脚を有するものに後出する。出土の遺物は縄文土器の他に土師器があり、5世紀～6世紀の時期のもので、製塩土器もほぼその年代が与えられるものと思われる。

大田貝塚（第5図・地名表12、第7図6）

尾道市高須町大字出口に所在する。松永湾を東に望み、西から東へのびる丘陵裾の標高3mの微高地に立地する。1925年の佐藤真穂氏の発掘以来数回にわたって調査がなされている。中でも、1925年の清野謙次氏の発掘では多数の埋葬人骨の出土があり⁶⁾、有名である。1964年には広島県教育委員会によって発掘調査がなされ、製塩土器が検出されている⁷⁾。製塩土器の出土した第1トレンチの層

序は、第1層表土、第2層旧表土、第3層黒褐色有機土層、第4層黄灰色砂質土層となるが、溝状遺構の検出された第4区では溝の埋土として第3層と第4層の間に黒色有機粘土層(仮りに第3'層とする)が存在する。第3層および第3'層が遺物包含層である。製塩土器は第3層、第3'層両層から出土しているが、両層出土のものは型的には同一のものである。製塩土器はいずれも倒杯形の台脚を有し、ワイングラス状の胴部をもつ型式である。胴部には全面に平行のたたき目を有し、たたき目は右上りのものが多く、台脚は指頭圧痕が顕著である。台脚は断面がふくらみ気味のものと同内反り気味のものがある。伴出の遺物としては土師器・須恵器があるが、須恵器は第3層からのみ出土しており、第3層出土の土師器・製塩土器は細片が多い。土師器は4世紀後半～5世紀前半のものがほとんどで、第3'層はそれらの土師器の純粋層と考えられる。製塩土器も安定した状態で出土していることからそれらの土師器に伴出するものと考えられる。

今免遺跡 (第5図・地名表13, 第7図7)

尾道市山波町497番地の3に所在し、松永湾を東に望む丘陵裾の標高約12mの地に立地する。1971年、工事中出土の遺物を尾道市教育委員会が採集している⁹⁾。製塩土器と共に土師器・土師質土器・須恵器・土錘などが出土しているが、採集資料のため共伴関係は不明である。製塩土器には2つの型式が存在する。一つは倒杯形の台脚を有し、ワイングラス状の胴部をもつと考えられる型式である。台脚はいずれも開き気味のものであるが、指頭圧痕は必ずしも顕著ではない。この型式には、底部が狭くカーブが急なものと同底部が広くカーブがゆるやかなものがある。また、底部付近にたたき目を有するものと、有さないものがある。たたき目は平行たたき目である。たたき目を有さないものにはしぼり目を明瞭に残すものが存在し、外面はナデ調整を主としている。今一つは口縁がやや内傾し、肩がやや張り肩から胴上部に最大径を有し、丸底に終わると考えられる型式である。外面は粗いヘラ削り、内面はナデ調整を行なっている。図には示されていないが、口縁部付近には痕跡的にたたき目を有するものと思われる。両型式とも胎土には砂粒が含まれ、焼成は良好、二次的な火を受けているらしい。

広塚2号古墳 (第5図・地名表14, 第7図8)

尾道市山波町廻り田に所在する。松永湾を東に望む標高約25mの丘陵末端に立地し、1974年に広島県教育委員会によって発掘調査がなされている。墳形は円墳であるが規模は不明で、横穴式石室を内部主体とする。出土遺物には須恵器・土師器・銀環・鉄片などがあり、製塩土器が1点出土している。製塩土器は尖底の型式で、ほぼ完形である。淡黄褐色を呈し、焼成は良好で、砂粒は少ない。器壁は薄い。外面の調整は不明だが、内面は口縁部付近に指頭圧痕がみられ、胴中央部付近にハケ目調整痕がみられる。古墳の年代は出土の須恵器から6世紀末に近い時期と考えられる。しかし、製塩土器は型的にみて古墳時代末以降に位置づけられ、須恵器の年代より新しいが、完形に近いところから追葬に伴う遺物と考えることもできよう。

古江浜貝塚 (第5図・地名表16, 第7図9)

尾道市向東町古江浜14078に所在し、小入江の西端の丘陵に接する微高地に立地する。元々は海浜であったらしい。1978年に尾道市教育委員会によって発掘調査がなされている⁹⁾。層序は、第1層表土、第2層黒灰色有機土層(遺物包含層)、第3層黄褐色砂層となっている。出土遺物には、縄文土

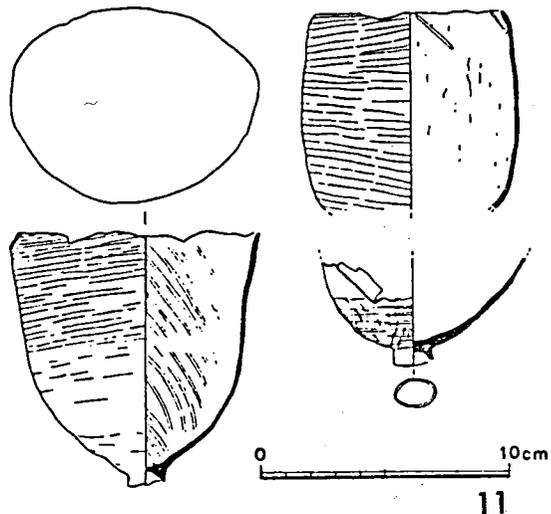
器（後期）、石鏃、貝類、魚骨、獣骨などがあり、工事中出土の遺物の中に製塩土器が含まれていた。製塩土器はいずれも倒杯形の台脚を有し、ワイングラス状の胴部をもつと考えられる型式である。脚部内面は指頭圧痕が顕著だが、外面は必ずしもそうではない。胴部にはほぼ全面に平行のたたき目を有するものと思われ、右上りのものと右下りのものが存在する。胎土は緻密で、焼成は良好、二次的な火を受けているらしい。

大島遺跡（第5図・地名表20、第7図10）

尾道市浦崎町満越に所在する。瀬戸内海に南面する微高地に立地し、竜王山から南へのびる丘陵に接する。1978年に尾道市教育委員会によって遺物が層位的に採集されている¹⁰⁾。層序は、第1層表土、第2-下層灰・砂の層、第2-中層製塩土器層、第2-下層灰層、第3層赤褐色土層、第4層黄褐色砂層となっている（本稿でいう第2層は報文中の第1層にあたる）。第2層、第3層両層から製塩土器が出土しているが、上下では型式が異なる。第3層出土の製塩土器はいずれも細片で器形を推定できるものはない。しかし、以前第3層相当層から採集されたとする資料があり、それらには2つの型式が存在する。一つは倒杯形の台脚を有し、ワイングラス状の胴をもつと考えられる型式のもので、台脚は指頭圧痕が顕著である。今一つは口縁がやや内傾気味で、胴がややふくらみ丸底に終わると考えられる型式である。口縁から肩にかけて平行のたたき目を有する。この型式にはほとんど肩を有さないものと肩がやや張るものがある。第2層出土のものは口縁もしくは胴上部に最大径をもち、胴部がゆるいカーブを描きながら尖底に終わる型式のものである。器壁は薄く、内外とも調整は不明だが、調整は粗い。所々に指頭圧痕が認められる。

大浜広島遺跡（第5図・地名表22、第8図11）

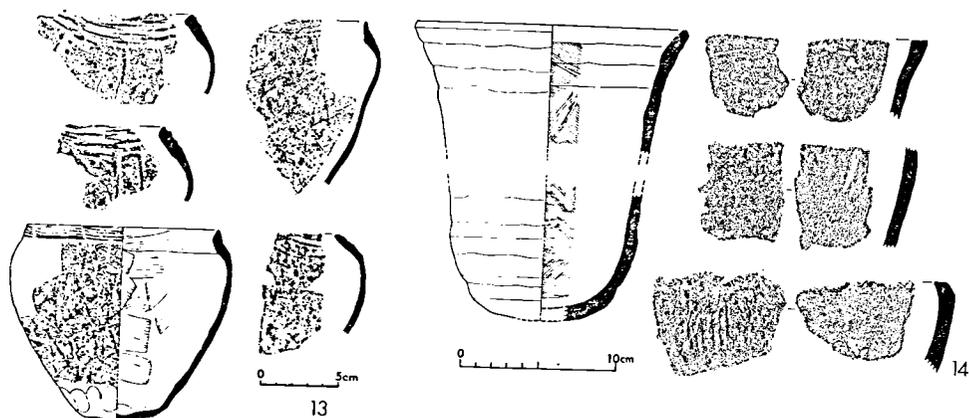
因島市大浜町倉谷に所在する。瀬戸内海を東に望む標高5mの小扇状地に立地し、北側に小丘陵が存在する。1965年に因島市教育委員会、1966年に広島大学によって発掘調査がなされている¹¹⁾。一帯には地表下に縄文土器・土師器などが混在する厚さ20~50cmの包含層が約200㎡にわたって存在するが、1966年の調査では一辺4mの方形プランの住居址が検出され、土師器・製塩土器が伴出した。製塩土器は台脚を有する型式のもので、胴部は深鉢形もしくはワイングラスに近い形態をとっている。器壁は薄く、胴部外面にはほぼ全面に平行のたたき目が施されている。台脚は非常に小形化しており、直立気味で高さも低く、台脚部消失直前の形態と考えられる。台脚を有する型式の中では最も新しい時期に位置づけられる。全形を窺える資料も存在し、特に完形品の存在は破片がほとんどである製塩土器にあっては貴重な資料を提供している。伴出の土師器は須恵器を伴わず5世紀中頃の年代が与えられるものと考えられる。



第8図 広島県出土製塩土器(3)
(11.大浜広島遺跡) (文献11より転載)

兜山北古墳（第5図・地名表28，第9図13）

三原市沼田東町納所山崎に所在する。沼田川流域では最大規模をもつ兜山古墳と同じ丘陵に存在し、沼田川を北に望む兜山古墳から北へやや下った丘陵端に立地する。径約10mの円墳で、横穴式石室を内部主体とする。玄室内部が攪乱をうけており、排土中から刀子、鉄銚、鉄片などと共に製塩土器が5個体以上出土している。製塩土器は口縁が短くやや内傾し、若干肩が張り、尖底気味の丸底に終わるものである。口縁部付近に平行のたたき目を有し、胴部には格子状のたたき目が痕跡的に認められる。外面は上下方向を主体としたナデ調整がみられ、内面は肩から底部までヘラ削りを行なった後上下方向を主体としたナデ調整を行なっている。底部は内外面とも指頭圧痕の痕跡が認められる。器壁が薄く、胎土にはあまり砂粒を含まず、焼成は良好である。横穴式石室から出土のため古墳時代後期であることは明らかであり、型的にも6世紀代に位置づけられる。



第9図 広島県出土製塩土器(4) (13.兜山北古墳 14.下岡田遺跡)

下岡田遺跡（第5図・地名表52・第9図14）

安芸郡府中町城が丘に所在する。西南にのびる低丘陵の南端に立地し、標高は約10mである。1963～1967年まで4回にわたって府中町教育委員会により発掘調査が行なわれている¹²⁾。調査により古代～中世の建物群が検出され、特に古代の建物群については駅家の可能性が考えられている。第2次調査(1964)において、3間×3間の掘立柱建物跡の東側井戸より須恵器・土師器、木簡などと共に製塩土器が検出された。製塩土器は口縁が広がり気味で胴が非常に長く、丸底気味の平底に終わると考えられるものが出土している。器壁は厚く、砂粒を多く含み、輪痕の痕跡を明瞭に残している。内外ともにハケ目調整を行なっており、口縁部付近はさらにナデを行なっている。底部付近は赤化し、2次的に火を受けたものと考えられる。また、器形は前述の製塩土器に類似するもので、開き気味の口縁で尖底に近い平底もしくは丸底を呈する器形になると考えられるもので、内面に布痕を有するものも存在する。器壁はやや厚く、砂粒を比較的含んでいる。布目にはやや粗いものと細かいものがある。出土の土師器・須恵器より奈良時代後半～末頃と考えられる。

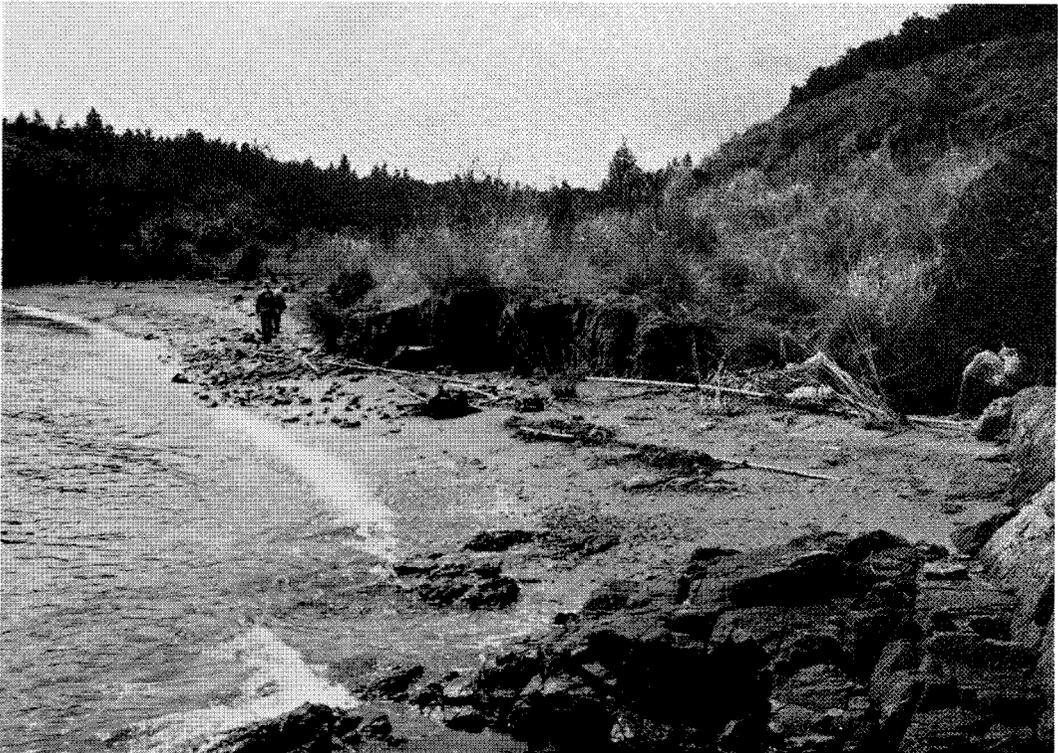
本文の作成にあたっては、広島大学文学部考古学研究室潮見 浩・川越哲志・河瀬正利先生の御指導をうけ、また遺物の実測、拓影作成ならびに図面製図には河瀬正利先生、広島大学大学院生古門雅高・小池伸彦・土佐雅彦・山崎やよい各氏の御協力をうけた。文末ながら、篤く御礼を申し上げる。

註

- 1) 伊吹 尚・河瀬正利・小都 隆・中田 昭「ザブ遺跡」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』1973
- 2) 村上正名『備後柳津村馬取・下迫両貝塚試掘報告』1939
- 3) 松崎寿和・潮見 浩・木下 忠・藤田 等・本村豪章「松永市馬取遺跡調査報告」『広島県文化財調査報告』第4集 1963
- 4) 註 2) に同じ。
- 5) 註 3) に同じ。
- 6) 清野謙次『日本石器時代人研究』1928
- 7) 潮見 浩・川越哲志・河瀬正利「大田貝塚」『広島県文化財調査報告』第9集 1971
- 8) 尾道市文化財協会埋蔵文化財部『尾道市文化財報告』1979年
- 9) 註 8) に同じ。
- 10) 註 8) に同じ。
- 11) 潮見 浩「因島市大浜広島遺跡の発掘調査」『広島県文化財ニュース』第31・32合併号 1966
- 12) 府中町教育委員会『府中町下岡田古代建築群遺跡調査報告』第1集 1963, 府中町教育委員会『府中町下岡田古代建築群遺跡調査報告』第2集 1964, 府中町教育委員会『下岡田遺跡発掘調査概報 1965年度』1966, 府中町教育委員会『下岡田遺跡発掘調査概報 1966年度』1967



生野島・かねね1号（国実島海岸）遺跡全景



生野島・小馬取遺跡全景



生野島・月の浦 3 号遺跡遠景



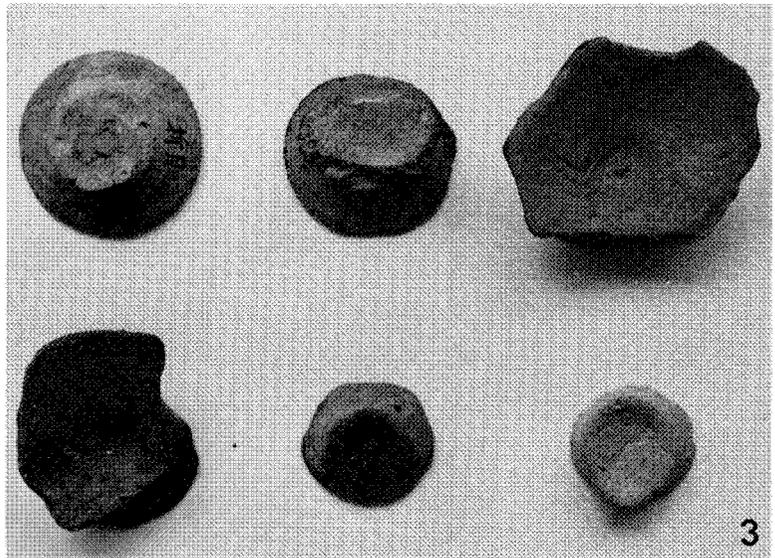
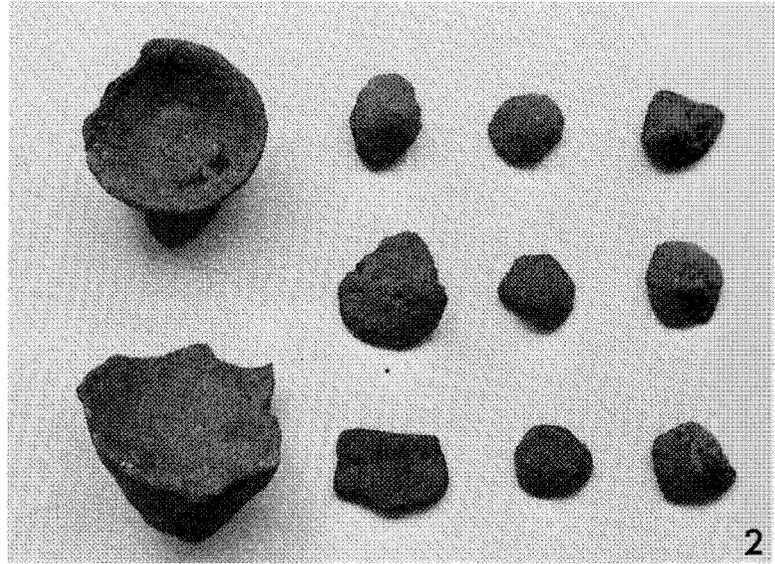
生野島・月の浦 3 号遺跡製塩土器包含層（下位の黒色部分）



白島・牛ヶ首遺跡全景

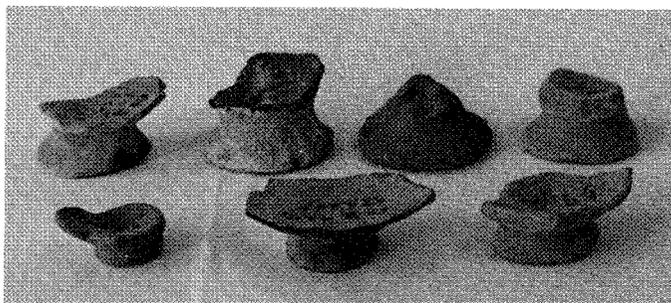


白島・牛ヶ首遺跡製塩土器包含層（中位以下の黒色部分）



- 1 生野島・榎迫遺跡出土土器(上: 厚手粗製土器
下: 脚台付土器)
- 2 生野島・小馬取遺跡出土土器(左上: 脚台付土器
他は薄手尖底土器)
- 3 折免島・折免島南遺跡出土脚台付土器
- 4 長島・布浦遺跡出土土器(上: 脚台付土器
下: 厚手粗製布目痕土器)

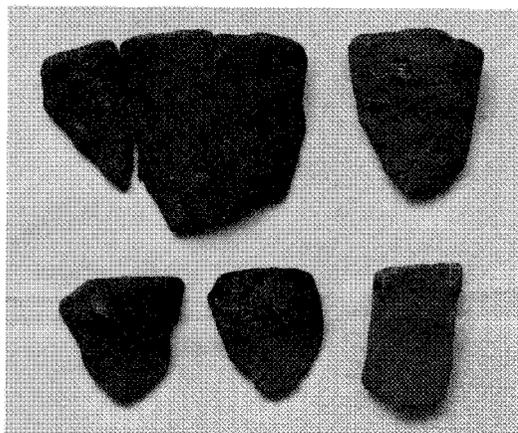
4



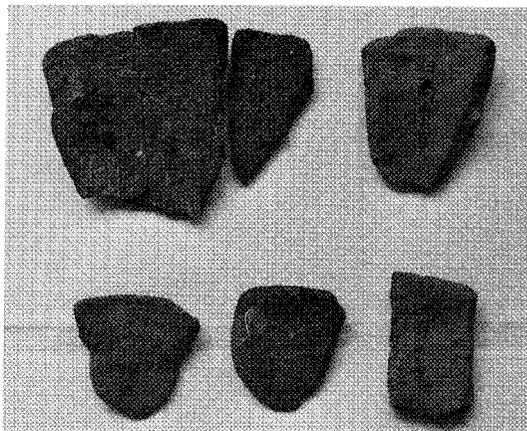
白島・牛ヶ首遺跡出土脚台付土器



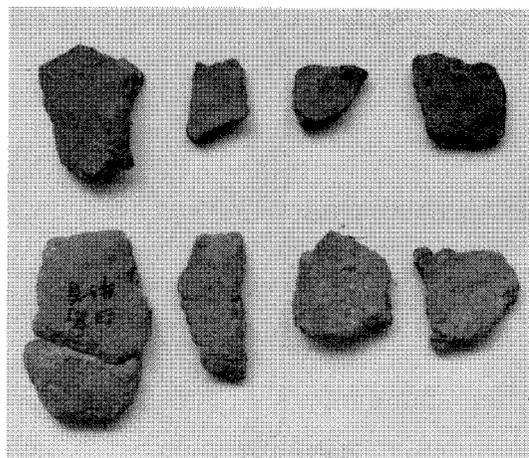
白島・牛ヶ首遺跡出土厚手尖底土器



白島・牛ヶ首遺跡出土厚手粗製土器 (表)



(裏)



白島・牛ヶ首遺跡出土厚手粗製布目痕土器 (表)



(裏)